

第2章 史跡宇宿貝塚の基本情報

第1節 遺跡の周辺環境

1 地理的環境

(1) 奄美市

南西諸島の島嶼は、薩南諸島（鹿児島県）と琉球諸島（沖縄県）に大別されるが、奄美群島は薩南諸島に含まれている。奄美群島は、およそ北緯27度～29度に位置しており、喜界島、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島の有人8島から構成されている。

本市は、奄美群島で最大規模を有する奄美大島に所在している。平成18年（2006）3月20日、笠利町・名瀬市・住用村の3市町村が合併して誕生した自治体である。人口は、令和5年（2023）2月28日時点で41,543人を数える奄美群島最大の自治体であり、奄美群島12市町村における中核都市として発展を続けている。

本市は、旧自治体の行政区域を踏襲して名瀬地区（奄美市名瀬）、住用地区（奄美市住用町）、笠利地区（奄美市笠利町）の3地区に大別されている。北部（龍郷町を除く）に位置する笠利地区の地勢は、他2地区と異なる様相を呈している。そこで、本市の地勢と集落を概観しておく（表7）。

(2) 笠利地区

史跡が所在する笠利地区は、名瀬地区や住用地区以南を覆うような急峻な山地はなく、笠利半島のほぼ中央に低平な山脈が南北に分布して



図2 奄美大島の位置

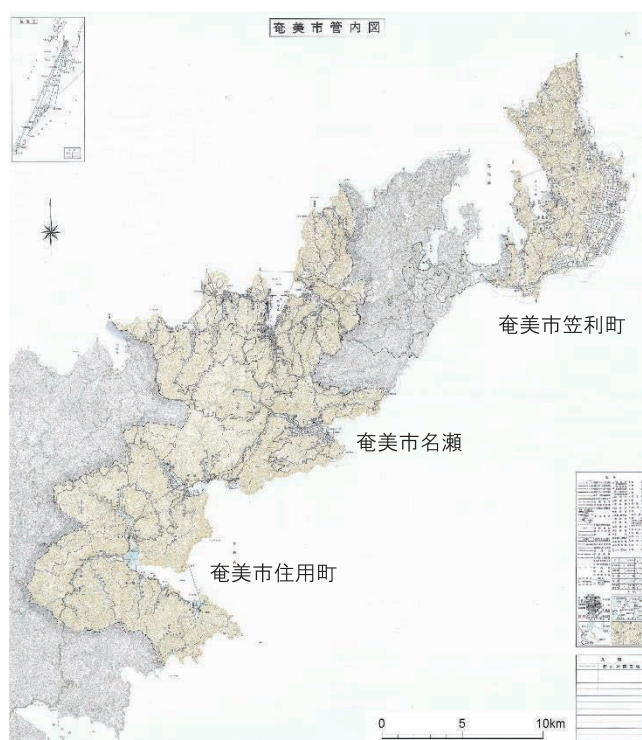


図3 奄美市管内図

地区	地勢	集落
奄美市 名瀬	ほとんどが山地で占められ、中型河川・大型河川が複数貫流する。谷地の狭い沖積平野を中心に居住空間が形成され、歴史的な行政区分をふまえた「古見方」「上方」「下方」「市街地」の4地区に分けられている。 笠利町西海岸と同様に、ほとんどの集落が左右・背後の三方を山地で囲まれた集落景観を呈している。	東海岸に位置する「古見方地区」は、小湊・名瀬勝・前勝・西仲勝・西田・伊津部勝・朝戸・崎原の8集落から成る。 西海岸に位置する「上方地区」は大熊・浦上・有屋・仲勝・有良・芦花部の6集落、「下方地区」は朝仁・小宿・里・福里・知名瀬・根瀬部の6集落から成る。 「市街地地区」も西海岸に位置していて、名瀬湾周辺に形成され、もともと金久と伊津部の2集落から成る。
奄美市 住用町	町域のほとんどは急峻な山地で占められ、奄美大島屈指の大型河川が複数貫流する。奄美大島の主要山岳の標高上位10山のうち、6山が住用町に所在し、住用町の急峻な山岳地形がうかがわれる。 また河川についても、奄美大島の主要二級河川の順位10河川中、住用川・役勝川・川内川の3河川が住用町を貫流している。谷地の狭い沖積平野を中心に居住空間が形成され、歴史的な行政区分をふまえた「東城地区」「住用地区」の2地区に分けられている。	「東城地区」は、和瀬・城・摺勝・川内・東仲間・見里の6集落から成る。 「住用地区」は、西仲間・石原・役勝・山間・戸玉・市・青久の7集落から成る。海岸に面して営まれている集落が少ないのも特徴的で、外洋に面している集落は、和瀬・城・青久の3集落のみである。
奄美市 笠利町	東海岸と西海岸で地勢の相違が著しい。東海岸は台地、西海岸は低い山地が展開する。河川は、小型河川がほとんどであるが、山地が多い西海岸には中型河川もある。 東海岸では平坦地に集落が隣接して営まれるが、西海岸では山地で囲まれた沖積地に集落が営まれ、隣接する集落と山地で隔てられる。東海岸は、サンゴ礁が発達している。	東海岸は、用・笠利（1区・2区・3区）・辺留・須野・崎原・土盛・宇宿・城間・万屋・和野・節田・平・土浜・用安の16集落から成る。 西海岸は、佐仁（1区・2区）・屋仁・川上・赤木名（外金久・中金久・里）・手花部・前肥田・打田原・喜瀬（1区・2区・3区）の13集落から成る。

表7 奄美市名瀬・住用町・笠利町の地勢

いる。北側から、高崎山（150.0m）、高岳（183.6m）、淀山（176.0m）、大刈山（180.7m）等の山地が連なる。この山脈を境界として東海岸と西海岸に大別され、東海岸は台地、西海岸は山地が展開する対照的地形を呈する。

東海岸は、段丘地形が発達した台地が広がり、海岸線の発達した砂丘地形にほとんどの集落が営まれている。河川は、小型河川がほとんどである。東海岸は、サンゴ礁と海岸砂丘の発達が顕著である。史跡が所在する宇宿集落一帯の海岸線は島内で最もサンゴ礁の規模が大きく、海岸砂丘には先史時代の貝塚遺跡が集中分布している。笠利集落から節田集落にかけては、山地と海岸の間に段丘地形が認められる台地が広がり、島内でも特に平地面積が大きい地域でもある。当該地域一帯は、サトウキビ等の耕作地として利用されている。

西海岸では山地が海岸まで迫り、山地に挟まれた狭い沖積平野に集落が営まれている。北側の谷地から、佐仁川、屋



図4 奄美市笠利町管内図

仁川、前田川（赤木名）、手花部川、宮久田川（喜瀬）等の中型河川が認められる。西海岸は、佐仁・屋仁集落はサンゴ礁が発達しているが、外金久・手花部・前肥田・打田原・喜瀬集落は、笠利湾の内海に面し、いずれも遠浅で干潟が発達している。

（３）宇宿集落

宇宿集落は、笠利地区の東海岸に面して位置している。明治12年（1879）創立の歴史を持つ宇宿小学校を擁する東海岸有数の大きな集落で、その校区は、崎原・土盛・宇宿・城間・万屋の5集落で構成されている。令和5年（2023）2月28日時点で、126世帯・人口238人を数え、校区内で最大規模を誇る。

宇宿集落は、宇宿地区と大瀬地区から成っており、それぞれが東西2列の海岸砂丘上に位置している。宇宿地区は、史跡と同一砂丘上に立地し、大瀬地区は、現在の海岸線に形成された大瀬海岸の砂丘上に立地している。



図5 宇宿集落の空間区分

集落は、現在、3つの空間に大きく区分することができ、宇宿地区を東西に通る「ナカミチ」を境に、南側を「メーグミ」、北側を「ウシログミ」とし、大瀬地区を「ハンゴ」（フースィ）と区分している。それらを数十軒単位で11班に分けて、集落行事や奉仕作業等を行っている。かつては、宇宿地区の中央を南北に通る「フーミチ」の東側を「ハマカタ」、西側を「ヤマカタ」と大きく区分し、ハマカタを「カンザラゼ」・「ソノク」・「メェゴハナ」・「ニャンクチ」・「ハシハナ」、ヤマカタを「アスト」・「イケダ」・「デーク」・「フ」・「イリ」・「クブ」・「アグタ」・「メント」・「ケアゲ」と小さく区分していたが、現在では使われていない。

多くの文化財が残されている集落でもあり、周知の埋蔵文化財包蔵地が9箇所や国指定重要文化財（建造物）「泉家住宅」や奄美市指定文化財「宇宿稲すり踊り」（無形民俗文化財）、「宇宿高又遺跡」（史跡）等、宇宿集落周辺には文化財群が数多く認められる。

2 自然的環境

（１）気候

奄美群島は、北緯27～29度に位置していて、世界的には中緯度乾燥帯にあたり、砂漠化してい

る地域が多い。しかし、奄美群島は、日本列島で沖縄諸島・先島諸島、小笠原諸島とともに亜熱帯環流内に位置している地域であり、その外縁部分を貫流する黒潮とモンスーン（大気循環）の影響により、中緯度乾燥帯には稀な亜熱帯湿潤気候となる。

名瀬地区の年平均気温は 21.6℃と温暖で、鹿児島市に比べて 3.0℃高い。年平均降水量は 2,837.7mm で東京の約 2 倍の降雨がある。梅雨時期の 5～6 月、台風時期の 8～10 月は降水量が多く、さらに 11 月から 4 月も月平均降水量が 150mm を超える日本有数の多雨地域である。年間におけるおおよその季節区分としては、春（3・4 月）、初夏（5・6 月）、夏（7・8 月）、秋（9・10 月）、晩秋（11 月）、冬（12～2 月）となる。

（２）地形・地質

笠利地区は、中央を南北に縦断する山脈によって東海岸と西海岸に分けられる。東海岸では段丘地形が発達した台地が広がり、海岸線の砂丘地形やサンゴ礁も発達している。西海岸では山地が海岸まで迫り、山地に挟まれた狭い沖積平野が認められ、サンゴ礁と干潟が発達している部分がある。東海岸では、和野集落から土盛集落にかけて東西 2 列の砂丘列が広がっている。奄美大島でも比較的大きな規模の砂丘である。現在の海岸線に形成されている砂丘は、完新世新砂丘（約 2,000～3,000 年前以後に形成された砂丘）と理解されているもので、弥生時代並行期以降の遺跡が分布している。

その背後の砂丘は、完新世古砂丘（約 6,000～7,000 年前より以前に形成されている砂丘）と理解されているもので、縄文時代後期・晩期頃及び中世の遺跡が分布している。宇宿貝塚もこの砂丘上に位置している。

宇宿貝塚は、砂丘に所在していることから、史跡の本質的な価値を構成する要素として、その地形的特徴の理解を深めておく必要もある。そこで、羽田麻美委員（自然地理）と砂丘地形を中心とする自然

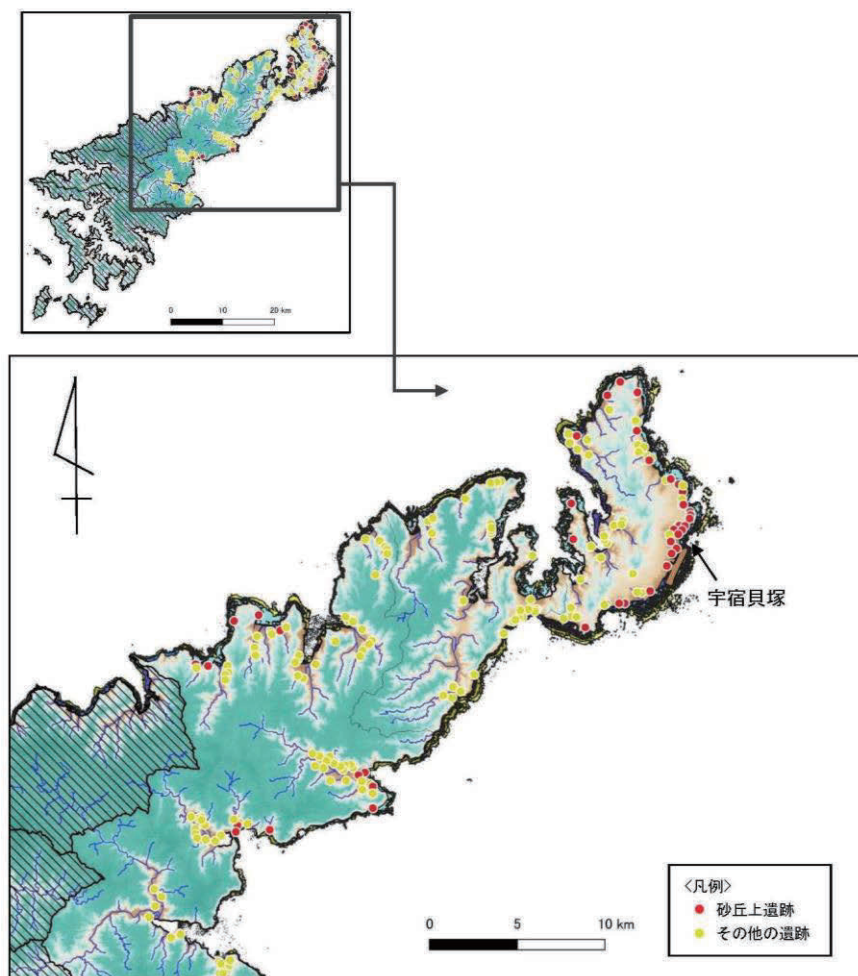


図6 奄美大島における立地環境別遺跡分布図
（大和村・宇検村・瀬戸内町は除く）

奄美大島北部（奄美市笠利町、龍郷町）には、196箇所以上の遺跡が認められる。中でも、砂丘上に立地する遺跡は、台地や低地の占める割合が大きい笠利地区の東海岸に集中して分布している（図6）。東海岸は、山地が卓越する大島中南部に比べて、サンゴ礁（裾礁）地形や海成段丘の発達が良好な地域である。大島の海成段丘は、高位・中位・低位の3群に大別でき、笠利地区では中位面群（標高10～60m）が広く分布する（池田1977）。また、これら段丘面の高度分布から、中位面が形成された125,000年前以降の大島では、笠利地区でやや急速な隆起域が形成されたこと、それ以外は不動ないし若干の沈降傾向にあることが推測されている。それが、笠利地区において、海成段丘が顕著に発達していることやその後に生じる砂丘形成にも影響を及ぼすものと考えられる。笠利地区の東海岸における砂丘形成の要因は、完新世（特に縄文海進）以降、サンゴ礁・礁池部から供給される多くの砂が幅広い海浜を発達させ、冬季の北～北東季節風の影響により飛砂が豊富に生じ、それら飛砂を堆積させる段丘崖等の地形が連続的に分布する環境があったことだと想定される（目



13

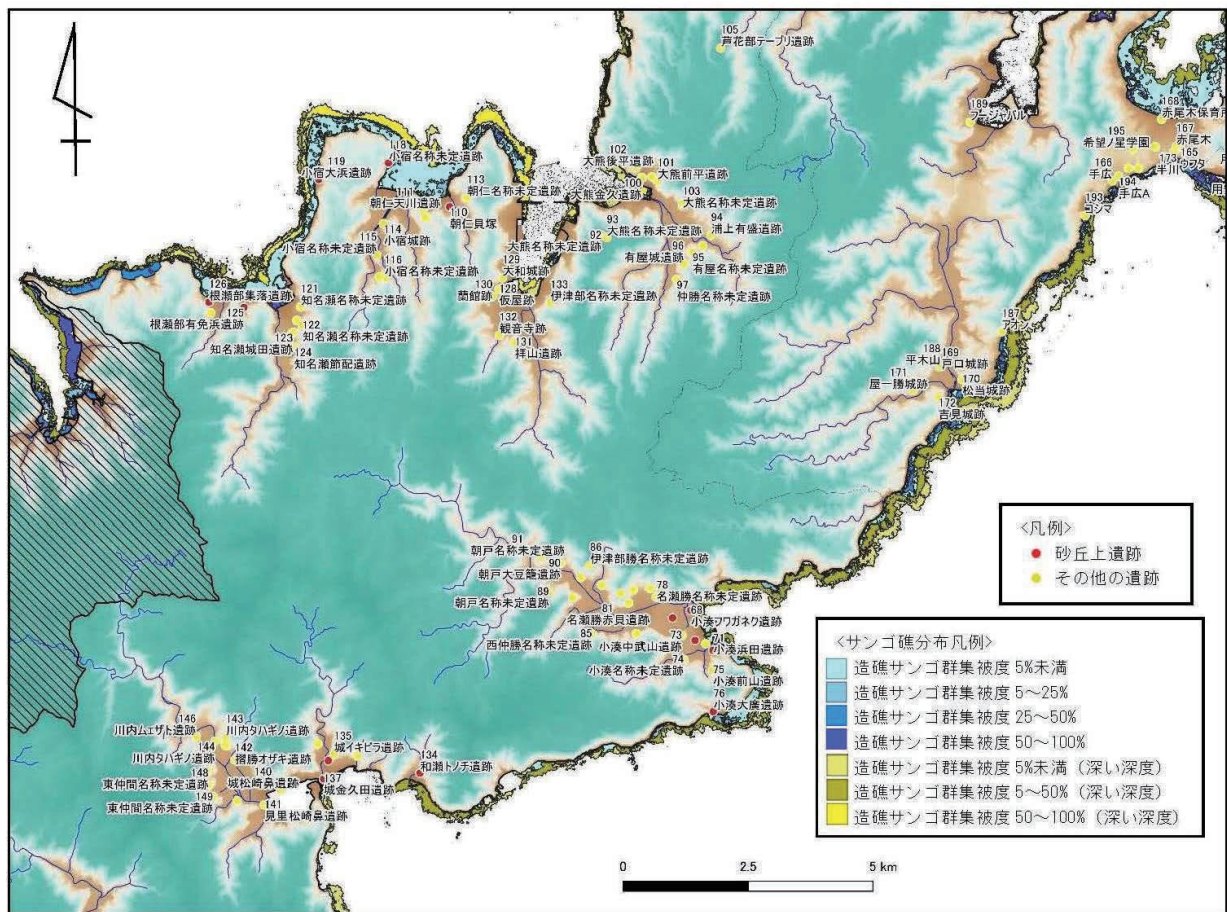


図8 大島中部における遺跡分布とサンゴ礁地形

崎 1998)。

笠利地区における遺跡分布とサンゴ礁地形の広がりを見ると、地形と砂丘上遺跡の分布が大きく関係していることが確認できる(図7)。宇宿貝塚と同様に、大型砂丘上に立地する小湊フワガネク遺跡(奄美市名瀬)の立地環境をみると、サンゴ礁地形の発達に限られており、その規模は笠利半島に比べてはるかに狭小であることが分かる(図8)。

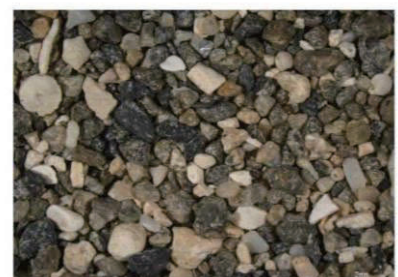


写真3 宇宿貝塚(左)と小湊フワガネク遺跡(右)が立地する砂丘の構成砂

また、両遺跡が立地する砂丘の構成砂は、図組成が異なる(写真3)。すなわち、宇宿貝塚の砂丘は、サンゴや有孔虫、貝殻片等のサンゴ礁に由来する生物遺骸を多く含む海浜砂が主体であり、小湊フワガネク遺跡の砂丘では大川による川砂と海浜砂が混合した構成を成す。砂丘砂の構成から、東海岸では完新世におけるサンゴ礁(裾礁)の発達とともに、海域から供給される風成砂により砂丘が形成されたと考える。サンゴ礁は、陸域に砂浜と砂丘という地形環境を形成させることに加え、サンゴ礁を中心とした多様な生態系を生み出す。礁地形の発達とともに人間にとっての豊かな食料

資源確保の場が形成され、縄文時代以降、砂丘上が居住地として選択されるようになった。さらに、宇宿貝塚周辺は、特に砂丘上遺跡が集中している（図9）。この地域は、前川（河川）が形成した低地帯に位置しており、河川が存在が砂丘の大型化や水資源確保の観点から遺跡立地条件のひとつになったと考える。

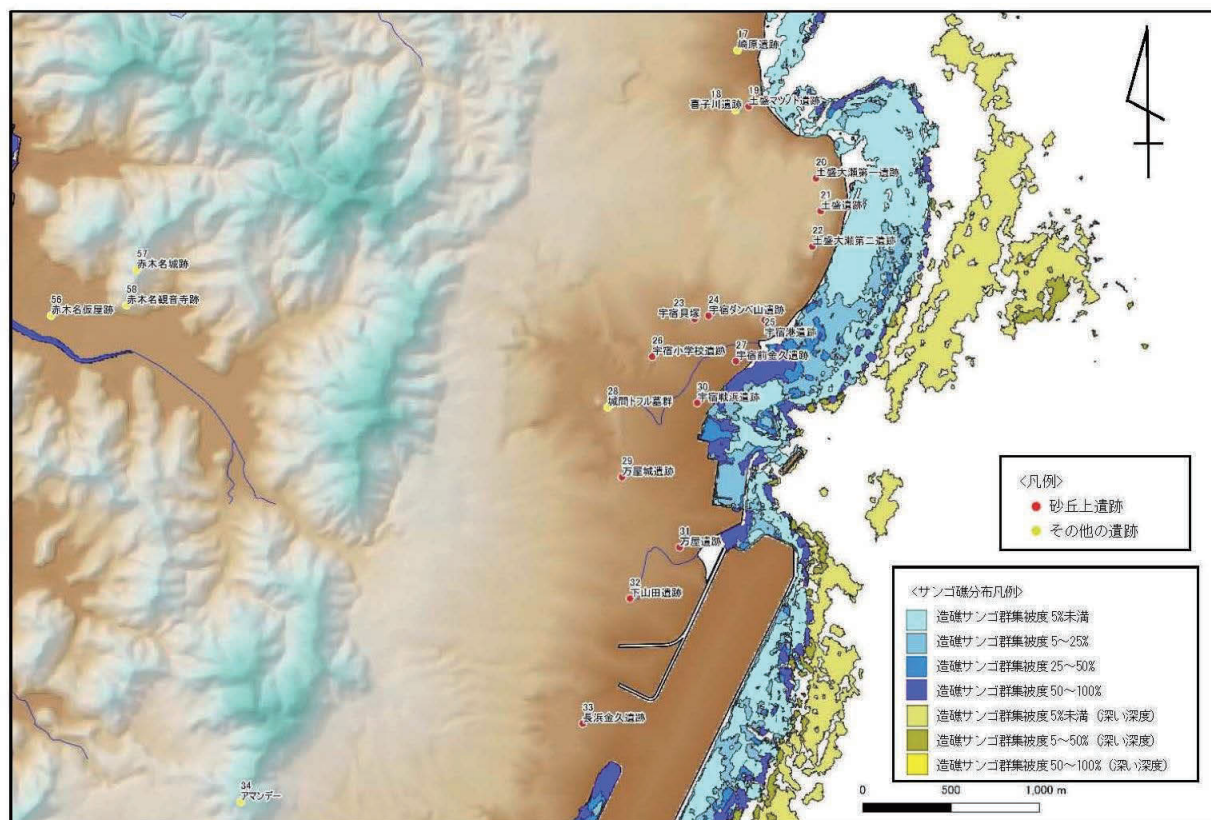


図9 宇宿貝塚周辺の地形と遺跡分布

(3) 植物相

宇宿貝塚が所在する砂丘地及びその周辺について、高美喜男氏（奄美市文化財保護審議会委員）と平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）で植生調査を実施し、その分布状況を確認した。調査地は、宇宿貝塚が立地する古砂丘及び後背農耕地一帯を調査地X，古砂丘形成後の砂丘地の住宅地及び農耕地一帯を調査地Yとした（図10）。

調査地Xにおいては、60種の植物が確認された（表8）。遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる植物種は、アカギ、ギンネム、ト

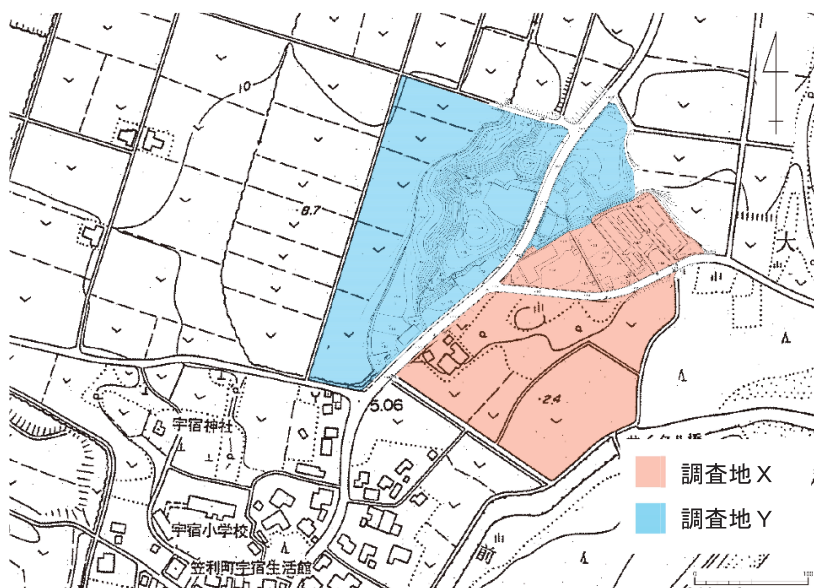


図10 植生調査地

樹木の種類	和名
樹木 (35 種)	シマグワ・タイワンウオクサギ・ツゲモドキ・アカギ・ガジュマル・ハマビワ・ゴモジュ・オオバギ・トベラ・モクタチバナ・マルバチシャノキ・アカメガシワ・ゲッキツ・マサキ・オオハマボウ・リュウキュウタラノキ・ヤブニッケイ・シャリンバイ・フカノキ・ハマヒサカキ・ソテツ・フクマンギ・カンコノキ・イヌマキ・オオシマコバンノキ・ホルトノキ・ギョクシンカ・クチナシ・ヤドリフカノキ・トクサバモクマオウ・イヌビワ・リュウキュウエノキ・アカテツ・ブッソウゲ・オキナワキョウチクトウ
つる性 (10 種)	クズ・フウトウカズラ・オオイタビ・ノアサガオ・テリハツルウメモドキ・サツマサンキライ・オキナワテイカカズラ・シラタマカズラ・ハマサルトリイバラ・ムベ
草本 (15 種)	アキノノゲシ・ヤブラン・カタバミ・ゲットウ・リュウキュウコスミレ・オニヤブソテツ・ツルソバ・カラムシ・ニシヨモギ・タイワンソクズ・シロノセンダングサ・ススキ・キキョウラン・クワズイモ・アマクサシダ

表8 調査地Xに生育する植物一覧

クサバモクマオウの3種が認められた。この3種は奄美大島へ移入されたもので、大木になると深く根を張る樹木であることから、遺跡の保存に影響を及ぼしかねない。その他に確認された植物種は、農耕地、住宅地や海岸に生育するものが大半を占めていた。

調査地Yにおいては、38種の植物が確認された（表9）。遺跡に影響を及ぼす可能性が考えられる植物種は、ギンネムの1種のみだった。その他に確認された植物種は、古砂丘と同様に農耕地や海岸に生育するものが大半を占めていたが、中には庭木として植えられているものも見受けられた。

先述したアカギ、ギンネム、トクサバモクマオウの3種は、幼木が散見されたので、今後の生育状況を注視しておく必要がある。

樹木の種類	和名
樹木 (24 種)	ガジュマル・ハマビワ・ソテツ・ゲッキツ・シマグワ・アカテツ・ヤドリフカノキ・オオシマコバンノキ・フクギ・モクタチバナ・ヤブニッケイ・タイワンウオクサギ・オオバギ・オオハマボウ・トベラ・マサキ・イヌビワ・ホルトノキ・サキシマフヨウ・センダン・オオムラサキシキブ・ギンネム・インドゴムノキ・ゴモジュ
つる性 (7 種)	フウトウカズラ・ハスノハカズラ・オオイタビ・ヘクソカズラ・テリハノブドウ・ノアサガオ・リュウキュウガネブ
草本 (7 種)	ツルソバ・アキノノゲシ・オニヤブソテツ・タマシダ・ススキ・ゲットウ・アマクサシダ

表9 調査地Yに生育する植物一覧



写真4 アカギ



写真5 ギンネム



写真6 リュウキュウタラノキ



写真7 ソテツ

(4) 動物相

宇宿貝塚が所在する砂丘地及びその周辺の動物相の調査として、平城達哉（奄美市教育委員会文化財課）が鳥類ルートセンサス調査ならびに夜間ルートセンサス調査を実施した。調査期間は令和3年（2021）11月から令和4年（2022）10月までの1年間で、調査は月に1回の計12回行った。結果は以下のとおりである。

これらの調査を通して、多数の動物種の生息が確認されたが、遺跡に影響を及ぼす可能性のある種は認められなかった。

①鳥類ルートセンサス調査

遺跡所在地内は、海岸、河川、農耕地、草地、森林等の自然環境が認められ、大瀬海岸や宇宿漁港をはじめ、奄美大島でも有数の渡り鳥の渡来地が所在する。今回は鳥類の分布状況を把握するため、図11の調査ルートを自動車で走行し、目視もしくは鳴き声によって識別できた種を全て記録した。調査開始時刻は、午後3時からとした。

12回の調査を通して、計68種の鳥類を確認した。そのうち、年間を通して同じ地域に生息する留鳥が13種、季節の移り変わりにあ



図11 鳥類ルートセンサスにおいて観察された鳥類の位置

わせて移動する渡り鳥が 55 種だった。これまでに奄美大島で記録された鳥類は 315 種である。今回の調査では、その約 22%が確認されたことから、この地域が鳥類にとって適した自然環境が残されているといえるだろう。

全ての月で観察されたのは、留鳥のリュウキュウキジバト、アマミヒヨドリ、イソヒヨドリだった。記録された留鳥は、われわれの生活圏内である住宅地や農耕地、草地などを主な活動場所とする種がほとんどだった。また、調査外の時間では、オーストンオオアカゲラやアマミコゲラなどのキツツキの仲間、カラスバトも観察することができた。

秋から春にかけては、多くの種類の渡り鳥が渡来してきており、大瀬海岸、大瀬海岸へ流れ出る前川、宇宿漁港では、特に多くの水鳥が確認された。

奄美大島には国際的にも希少な固有種が数多く分布している。今回の調査においても、環境省が定めるレッドリストに掲載されている種が 14 種確認された。

また、表 10 に掲載していない種でも、渡り鳥の中継地として多くの鳥類が立ち寄っており、令和 2 年（2020）4 月には、調査地内の農耕地において、奄美大島で初記録となるオオカラモズも確認されている。

土地環境	和名	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
海	ヒシクイ	●											
海	ヒドリガモ		●										
川・海	ハシビロガモ	●		●									
川・海	コガモ	●	●	●	●								●
川	カイツブリ	●	●										
農・住	リュウキュウキジバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
海	カワウ		●	●	●	●	●						
農	アマサギ							●	●				
森・川	アオサギ	●	●				●						
農・川	ダイサギ	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
農・海	チュウサギ	●			●			●		●			
川	コサギ							●				●	●
海	クロサギ			●			●		●				●
海	クロツラヘラサギ									●		●	
農	リュウキュウヒクイナ											●	
草・川・海	オオバン	●	●	●	●	●	●		●				
海	ダイゼン	●					●		●				
海	ムナグロ	●		●	●	●	●					●	●
海	コチドリ	●	●	●	●	●	●					●	
草・海	シロチドリ				●					●	●	●	●
海	メダイチドリ			●			●	●	●				●
海	オオメダイチドリ	●											
川	セイタカシギ					●	●		●	●			
草	ハリオシギ											●	
川	タシギ	●											
海	オオソリハシシギ						●						●
農	コシャクシギ						●						
海	チュウシャクシギ											●	●
海	アカアシシギ									●			●
川	コアオアシシギ						●						
海	アオアシシギ						●		●				
海	タカブシギ						●	●					
川	イソシギ	●	●										
海	キョウジョシギ					●							●
海	ミユビシギ			●									
海	トウネン											●	●



写真 12 クロツラヘラサギ



写真 13 サシバ

②夜間ルートセンサス調査

奄美大島の動物相の特徴として、夜行性を示す動物が多く分布していることが挙げられる。それらの生息状況を調べるため、鳥類ルートセンサスと同様の調査ルート（図 12）を自動車で走行し、目視もしくは鳴き声によって識別できた脊椎動物（哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類）を全て記録した。なお、調査開始時刻は、日没 30 分後とした。

12 回の調査を通して、鳥類 7 種、両生類 6 種、甲殻類 2 種が確認された。11 月と 12 月に記録されたトラフズクは、主にネズミ類を主食とするフクロウの仲間、奄美大島では冬鳥に分類される。今回の調査では確認されなかったものの、農耕地には外来種のクマネズミやワタセジネズミ等が十分に生息していることが予想される。この地で越冬はしなかったと想定されるものの、一時的な休息地として利用されていたと考えられる。

調査以外の時間では、爬虫類のアカマタとハブも確認された。

また、国内希少野生動植物種に

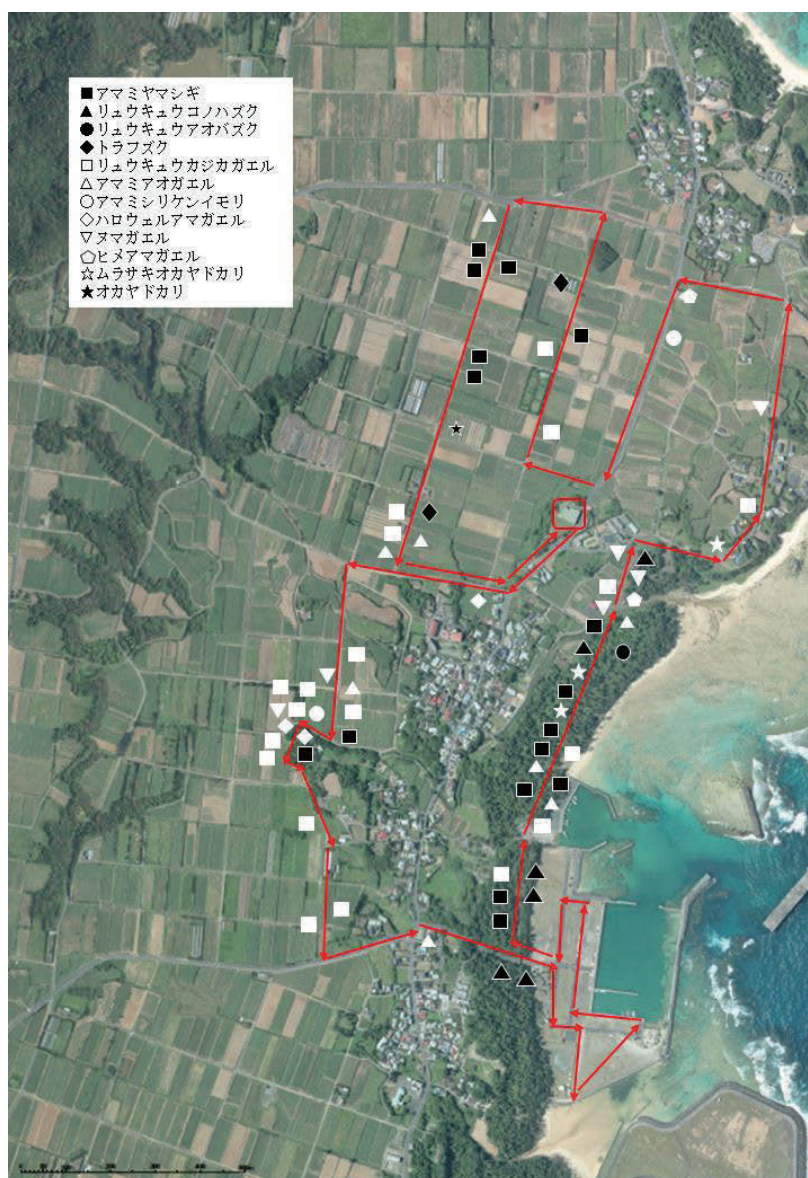


図 12 夜間ルートセンサスにおいて観察された動物種の位置

選定されているアマミヤマシギ，国指定天然記念物のムラサキオカヤドカリ，オカヤドカリをはじめ，法律・条例で保護されている種が記録されるとともに，環境省が定めているレッドリストに掲載されている準絶滅危惧（NT）が2種確認された。

分類群	和名	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
鳥類	リュウキュウコノハズク	●					●	●		●	●		
鳥類	リュウキュウアオバズク	●											
鳥類	トラフズク	●	●										
鳥類	サシバ	●											
鳥類	アマミヤマシギ	●	●		●	●		●		●			●
鳥類	シロハラ		●										
鳥類	アカハラ					●							
両生類	リュウキュウカジガエル	●				●		●	●		●	●	
両生類	アマミアオガエル			●	●	●							
両生類	ハロウエルアマガエル								●	●			
両生類	ヒメアマガエル						●						
両生類	ヌマガエル										●	●	●
両生類	アマミシリケンイモリ		●			●							
甲殻類	ムラサキオカヤドカリ		●							●		●	
甲殻類	オカヤドカリ											●	

表 11 夜間ルートセンサスで確認された動物種



写真 14 アマミヤマシギ



写真 15 アマミアオガエル



写真 16 オカヤドカリ



写真 17 ムラサキオカヤドカリ